『無者キリスト』を読む （新宿集会にて）

第七転「復活」（第三の旅人）〔短縮版〕
――第一部　キリストの実存十転――

２０１９年９月29日
弘野慶次郎

学んだ者が伝えていく使命　総序　復活「第三の旅人」　霊震　エマオ途上　復活のキリスト
の霊体　「十字架・御霊・復活」の三点セット

●学んだ者が伝えていく使命

今日はこの前の続きで、第七転「復活」（120頁）からなんですけれども、その前に、ぶれないように我々は「十字架と御霊と復活」の事態をしっかりと自分のうちに持っていないと、流されてしまうし、健全な福音からそれていくと、意味がなくなるんです。それで、僕はここへ来るようになってから、

「僕みたいな人間がなぜここに来るのか」

というようなことがあるけれども、僕自身が小池辰雄から学んだ信仰の在り方を――それは非常に健全で深い事態を僕は学んできました――それで、これをどうしても、学んだ者がその次の世代へちょっとでも伝えないといけないという思いが強くなって、それでこういう所に来るようなことになりました。家に居っても、なんとかして小池の信仰、その深さを知ってもらいたいという、その思いだけで僕はやっているみたいです。僕なんかズブの素人のまた素人なんですけれども、何としてでも、学んだ者がこれを伝えていく使命を――「使命」という言葉は嫌いですけれども――それがあると思います。そして僕はここに来ているということです。『無者キリスト』を僕は何回も読みますけれども、読むたびに新しい思いがいたします。

今日は「復活」という所ですけれども、その前に元に戻って――「総序」という所がありますが、この総序は小池辰雄がこの本を書くにあたって序として書いた。だから、コンパクトに小池の思いがここに凝縮されているように思うので――もう一度それを読んでみた上で、その「復活」というのが、キリストの生涯にあって、あるいは我々にとってどういう位置づけであるかというようなことを学びたいと思います。「総序」という所の１頁の始めから、途中はとばして、２頁の終わりくらいまで、それを再確認したいと思います。

●総序

それでは、そこの所をもう一度ちょっと学び直して「復活」の方へ入りたいと思います。

《総序

この『無者キリスト』は、神学的論説か、文学的叙述か。または聖書註解か、説話集か。それらの要素は然るべくふくまれてはいる。しかし本書は、その本質的な性格からいうと、聖書という神的ドラマの中に躍り込んだら、キリストの福音が私をとらえたので、その力に迫られながら、叙上の要素を通して書かしめられた告白であるといったらよいと思っている。

キリストはどういう範疇にも属し得ない人である。また一切のイデオロギーを立ち超えた人である。だから彼のふところの中に入って、そこから告白せしめられるのが、私にとっては最も本質的なことである。そんな現実、そんな念願で、私はこの一書を書いた。

キリストは実に無私な人、それゆえにこそ無限にして無量な人であった。一切の限定を彼の実存は笑うであろう。そういうキリストであるから、彼を無的実存者、要約して「無者キリスト」と呼ばしていただくのである。》

ここの数行に小池辰雄の思いが凝縮されております。1行から10行までの所ですけれども、聖書にしたって、あるいはこの『無者キリスト』にしても、漫然と読んでいると、福音の本質を見失ってしまう可能性がある。書かれていることは、何回も僕らは耳にしているので、そのひとつの言葉が自分の中に深く入らないで、表面的に過ぎ通っていくような感じがします。僕は読んでいても、最初に読むとそういう感じがして、小池が言おうとしたところの福音の本質を見失ってしまう可能性があるということで、ここを読んでいくということにした。本質から離れないで常に立ち帰るというようなことを僕は念願している。それを「忍耐」という。

「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」

という、「耐え忍ぶ」というのが、

「留まり続ける、キリストにとどまり続ける」

という意味を、小池辰雄を見たときにも、「とどまり続ける」という忍耐ということをもう一度学びたい。「忍耐」というと、何かしんどいから、それに耐え忍ぶという何かマイナス的なしんどいイメージがあるけれども、「忍耐」という言葉は、「耐え忍ぶ」というようなマイナスのしんどいイメージではなくて、

「キリストに在ったら全部が開けていきますよ」

というような意味での「忍耐」（忍待）ということ。本当に最後までキリストにしがみついていく――「しがみついていく」といったらしんどいですよ――向こうの方からしがみついてこられるのをこの「忍耐」と僕は思う。だから、忍耐という言葉も絶対にそういうマイナス的な暗いイメージではなくて、もっと明るいイメージとしての忍耐ということです。そのために『無者キリスト』を読みたいということなんです。それでここに、

「聖書という神的ドラマの中に躍り込んだら」
と書いてますけれども、
「聖書という神的なドラマ」
とあります。
「これは神のドラマの中に自分が躍り込まされている」
という意味なんです。小池辰雄はいつも「ドラマ、ドラマ」と言いますよ。この「ドラマ」というのは、
「神さまが人間の方に切り込んできた。その人間に対してドラマをやらせた、そのドラマの中に自分も入っている、取り込まれている」
というようなことで、この「ドラマ」という言葉を小池は使っている。
「神さまのドラマの中に自分も入れられている。その福音が、そのドラマの中に入ったら、自分をがんじがらめに捕らえてしまって、もう上から迫られてしょうがない」
というようなことで、神さまからいただいたそういう啓示みたいなものを小池が受けとったので、
「その受けとったものをしゃべらないではおれない」
というのが「告白」です。「告白録」というようなことを小池は言いますけれども、告白の真の意味はそういうことで、
「聖書という神さまが備えたドラマの中に自分も入れられて、そこで学んだことを言わざるをえなかった」
というのが、この「告白」という意味なんです。
その次のところは、キリストというのはすごい神さまの充満したかただから、どういう範疇にも入らないんですよというようなことです。
「キリストはどういう範疇（はんちゅう）にも属し得ない人である。」
どんな範疇にも入り得ないようなキリストの姿。それも僕は小池から学びました。
「キリストというかたは大変なひとですよ」
というのが小池辰雄の口癖でした。本当にキリストに捕まえられて、それもキリストから教えられたことを言わざるを得なかったということを言っている。
「彼のふところの中に入って、そこから告白せしめられるのが、私にとっては最も本質的なことである。そんな現実、そんな念願で、私はこの一書を書いた。」
私にとってこの『無者キリスト』を書いたこと、あるいは集会を開いたこと、それが最も自分には本質的なことで、そこから離れたら自分はもうありえないんだというような現実があるから、そういう思い、そういう念願で私はこの一書を書いたということを、ここで小池はまず最初に言ってくれている。

キリストというのは非常に大変な人だから、実はキリストというのは無私の人、全然自分というものが無いような人であったからこそ、神さまから無限の御霊をもらって、無限の力をもらって、活躍した人ということで、

「キリストは実に無私な人、それゆえにこそ無限にして無量な人であった。」

というようなことです。キリストというのは、

「一切の限定を彼の実存は笑うであろう。」

ということです。この「実存は笑う」という言葉を使うと、これは大変に何か難しそうに思いますけれども、神さまから遣わされたキリストは、もうどこにも属さないような人ですから、ちょうどイザヤ書にあるように、イスラエルの民に向かって、

「虫に等しいヤコブよ」

というような言葉がありますように、神さまはこれだけ凄いのに、

「お前たちは自分を主張して、一人前の顔しているけれども、お前たちは私が造った虫けらのような存在であるけれども、私はそれをこよなく愛している」

というようなことが、「笑う」ということですよ。「嘲笑する」ということではない。これは神さまにとっては、キリストを遣わして、すべての人を何とかして永遠の生命の中に入れようという思いが非常に強い。そういうふうな神さまの強い思いが、生命、愛なんですけれども、自分を主張していくと、

「お前は虫けらに等しい。私にあってすべてが成就されていくのに、すべての生命がもらえるのに、自分を主張するために虫けらに等しいものになっていく」

というようなことが、あのイザヤ書の

「虫けらに等しいヤコブよ」

という言葉です。そういうのがその「笑う」という意味だと僕は思っている。

「彼を無的実存者、要約して「無者キリスト」と呼ばしていただくのである。」

と。これはもう本当に無私の人であったから、そこに神さまの力、愛、生命、光が全部注ぎこまれて、キリストが活躍したということで、「無者」という名前でもって「無者キリスト」と呼ばせていただく、というようなことを小池はここで言っているわけです。

《新約聖書のマルコ、マタイ、ルカ、ヨハネの四福音書は、いずれも素朴にして霊妙なるものであるが、マルコ福音書は、キリストの行為面を劇的に彫刻し、マタイは言説面を詩的に表現し、ルカは心情面を絵画的に描写し、ヨハネは霊性面を音楽的に表出していると言えよう。であるから、イエスの行、言、心の三面をマルコ、マタイ、ルカの共観福音書が奇しくも有機体的にとらえ、そしてヨハネはこの三者を総括するかの如く、特に霊性面を深くとらえている。もちろん前三者の三相を一貫しているものは聖霊の事態であるが、ヨハネにおいてそれが最も深くあらわれている。》

ここは小池辰雄が四福音書の特徴を小池流に言っている。それはもうそれでいいと思いま

すので、ここはちょっと飛ばしておきます。その次ですね、

《四福音書の伝えるところは、過去のイエスの啓示的事実であり、それはまた現在の我々に主体的に関わる現実であり、未来をひきよせる預言的終末的現実である。福音書はそれゆえ、絶対次元が相対次元に、永遠が時間に、無限が有限にきりこんできた驚くべき現実で、この現実を体感しつつ身読する者には、つねに新しい神劇（オラトリオ）である。神学的に言うならば、イエスという神の人、即ち文字通り神霊の止まっている霊止（人）の出現により、その啓示的実存により、霊的言動により、そこに新しい審判と救済の徴があらわれたのである。》

ここを読んで、パッと分かるような人はいますかね。これはもの凄く難しい。そやけど、ここに小池の思いが凝縮されている。何回も言いますけれども、これをパッと読んだだけで、これを理解できるというのはなかなか難しいことですよ、「総序」の所で。

小池辰雄はいつも「啓示」という言葉をもの凄く使います。啓示というのは、上から神が示してくださる。だから、小池の本を読む時とか、小池の話を聞く時に、「啓示」という言葉はキーワードの一つと僕は思っている。ここに、

「福音書はそれゆえ、絶対次元が相対次元に、

我々は死ぬべき相対の次元に生きてます。そやけど、神さまの高次な次元というのは全然分からない。ところが、その神さまの絶対次元から――僕らはその絶対次元が分からない――我々に向かって切り込んできたという表現で言ってます。絶対次元から、神さまの高次な次元から我々相対的な次元に。そして

永遠が時間に、

という。僕らは時間の中に生きてます。そやけど、神さまの次元では、時間というのは、分からないんですよ。僕らは、時間というのは、何とはなしに生まれて死んでいくという時間を体感していますけれども、絶対者の次元というのは時間というものを超越しているから、どういうものか分からない。だから、永遠というのは、時間があるかないか、そんなことは僕も分かりません、次元が高すぎて。そういう永遠者が我々相対的に生きている時間の中に切り込んだということです。

無限が有限にきりこんできた驚くべき現実で、

その通りですね。言葉を代えていうと同じことなんです。

「絶対次元が相対次元に、永遠が時間に、そして無限が有限にきりこんできた驚くべき現実」

と書いてます。その驚くべき現実、その啓示。啓示された我々、ユダヤの民もその啓示の中で生きて行ったけれども、新約時代になってキリストという方が来られて、その啓示体の最たる者がキリストです。そういうふうな現実を小池辰雄は体感したから、もう自分の存在でもってキリストの存在を体感したから、

「それを体感しつつ、また聖書をからだで読んでいく者には常に新しい神劇が自分の中で開示されていきます」

ということ言っている。

この現実を体感しつつ身読する者には、つねに新しい神劇（オラトリオ）である。」

と。だから、小池の信仰というものは本当にもの凄く深くて凄いところを、キリスト自身を自分の中で生きてもう語らざるを得ないということを小池は言うわけです。聖書を読むたびに新しくなっていって、常に新しいところで自分はしゃべっているんだというような意味をここで込めている。

過去のイエスの啓示的事実、これは聖書を読んでみると、過去の出来事です。これが啓示的な事実で述べられているわけです。旧約聖書をみても、新約聖書をみても、啓示的事実だけで成り立っています。あれは人間が書いたものではない。神さまの御霊で書かれたのが、旧約聖書であり、新約聖書です。そういう過去の事実を我々は今、持っているけれども、現在に生きる人間は過去に生きているわけではない。常に新しい。

「キリストは今も生きている」

というその現実として、現在も我々に啓示的な事実を示しておられるというようなことで、現在の我々に神さまの方から主体的に関わっているんです。自分が主体的に神さまにつながるのではない。現実に我々に神さまの方が主体的に関わっているのが、この福音の世界なんです。そういう過去の事実が現在にも働いて、今度は、まだ我々にとっては未来のことですけれども、未来を引き寄せて終末的な現実を引き寄せている。

「新しい新天新地が来るんです」

というような未来のことまで、この聖書は書いています。そして、

「今は終末の時です、キリストが来られたから、終末の時です。そして、その終末が過ぎた時に本当の新天新地が来るんです」

というようなことをここで言っている。最後は、

「霊的言動により、そこに新しい審判と救済の徴があらわれたのである。」

と。キリストが来られて、我々を、全人類一人ひとりを例外なしに全部神の子にしたい、本当の神の子の姿にしたいということを、救済の徴としてキリストは来られた。

「キリストの言葉が人々を裁く」

という言葉がヨハネ伝にあるように、我々は神さまから裁かれているのではない。キリストが語られた言葉が我々を自然に裁いているということになっている。

「新天新地が来た時に一人ひとりが言い開きをしないといけない」

というような言葉があるように、

「本当に神さまに生きたかどうか」

ということが非常に大切で、

「神さまにつながらなかったら、もう自然に審判されて地獄の方に行きますよ」というようなことがここで書かれている。そういうことがこの数行の中に入っている。

《それは、人間の自主自律の事態には躓きのあらしであり、人間の極限状況には驚きの恵みであった。しかもこの福音は歴史の終末に至るまで、いかなる時代にも、そしてこの危機的な二十世紀の今日にこそ、最も深く関わるおとずれである。

キリストの本願は、我々の意志にコペルニクス的転回をもたらし、理知の中心に霊知を与え、情感の奥に霊感を湧きたたせ、身魂に大生命を与えないではやまないものである。》

ここでも、ちょっと読んだら、何かさっぱり分からないような感じがするけれども。

「人間の自主自律の事態には躓きのあらしであり、」

と書いてあります。神さまに反することをしている――人間は神さまを敵視しているんですよ――我々の本質というのは。「神さま、神さま」と言って、もの凄くあれしているようだけれども、いざとなったら神さまを棄てるというのが我々の本質ですよ。だから、「自分が、自分が」と言って、それにまつまわられているのが「パリサイ人（びと）」ですよね。自主自律の事態で、もう神さまを無視して、「己（おのれ）が、己が」といっている人間の本質。それがパリサイ人に顕著に表れている。「パリサイ人」というのは我々の本質を表しています。そういうふうな者にとっては、キリストというのは目の上のたんこぶだけではなくて、本当に敵対している人なんです。だから、

「躓きのあらしである」

と書いてある。躓きの嵐だから、人々がキリストを十字架にかけてしまった。だけど、そういう躓きの嵐でありながら、人間の極限状況には――もう極限状況になったら――驚きの恵みであると書いてある。

「人間の極限状況には驚きの恵みであった。」

と。もの凄くキリストというのは躓きでありながら、そのキリストを受けとったらもの凄い恵みですよ、ということをここで書いている。

「人間の自主自律には躓きのあらしであるけれども、人間の極限状況には

これは「極限状況」であってもなくてもいいんですけれども、

人間には驚くべき恵みである」

と。十字架による恵みが凄いですよと。だから、キリストは躓きでありながら、一端キリストをいただいたら、これは恵み以外のものではないというようなことが、ここで小池は言っているわけです。小池は恵みの恵みを受けとったから、こういうふうに言わざるを得なかった。驚きの恵みであると。普通、「恵み、恵み」と言いますけれども、

「驚くべき恵みである」

というようなことを小池はここで言わざるを得ないんです。

「この福音は歴史の終末に至るまで、いかなる時代にも、そしてこの危機的な二十世紀の今日にこそ、最も深く関わるおとずれである。」

小池が生きているのは20世紀ですね。21世紀あるいは22世紀になっても、人間が生きるかぎり、いかなる時代においても、本当に終末にいくまで、恵みの連続であるというようなことを言っているわけです。最後に、

「キリストの本願は、我々の意志にコペルニクス的転回をもたらし、」

「コペルニクス的転回」なんか言うから、余計に難しくなるけれども、「引っくり返された」ということですよ。180度引っくり返された。人生が変わった。人生の大恩人であると。これなくしては生きていけないというほど、人生が根底から引っくり返されたというのが、「コペルニクス的転回」です。それをキリストは与えざるを得なかった。キリストの本願はそういう唯一の恩人だから、人生をすっかり変えてしまうんですよ、ということなんです。そして、

「理知の中心に霊知を与え、情感の奥に霊感を湧きたたせ、身魂に大生命を与えないではやまないものである。」

そういう存在がキリストであって、それが神のご本願ですよと。身も心もです。身だけではない、心だけでもない、魂だけではない。身も心も全存在に大きな生命を、大生命を与えないではいられないというのが、神さまの本願なんです。その本願を小池はしかと受けとった。だから、この『無者キリスト』というのを書かないではおられなかったというのが、この「総序」に書かれていることなんです。

そういうことで、時々、この「総序」とか「まえがき」とかいうものにちょっと返ってみて、小池辰雄が何を言いたかったかということをもう一度確認し直すということをした上で、またそれぞれの所を読んでいくのがいいかなということを思います。

それから、毎回言われるように、

「神さまに対して畏敬の念を持つ」

というようなことは小池もよく言います。畏（おそ）れるべきものを畏れないといけない。

「そういう畏敬の念を、おののきを持つ。おののいてほしい」

というのが小池の思いです。おののいてほしいというようなことを小池はいつも言ってます。畏敬の念をもって聖書に接してほしい、そうすることでまた新しい展開が開けていくんだというようなことです。

●復活「第三の旅人」

それでは、「復活」の所に入っていきたいと思います。120頁。

《第七転　復活　「第三の旅人」（ルカ24章）
霊震

一週の初めの日、十字架の金曜から数えて三日日の晨（あした）、女たちがイエスの　屍（しかばね）に香料を塗ろうとて墓を訪ねに出かける。墓には岩盤が据えられ、ローマの兵隊が屍の番をしていたはずである。ところが岩盤は転げられ、ローマ兵の影も見えない。そしてイエスの屍も見あたらない。女たちは狼狽（ろうばい）してあたりを見廻した。

すると見よ、二人の人がすぐそばに立っているではないか。しかもその衣は白光に輝いている。女たちは恐（こわ）くなって面（おもて）を地に伏せた。その二人の者がそこでこう言った。

「何で死んだ者どもの中に生きた人を尋ねるのです。彼はもう此処には居ない。復活なさったのです。以前ガリラヤに居られたとき、今回のことについてどう語りなさったかを想い出してごらん。すなわち、『人の子は必ず罪ある人の手に付（わた）され、十字架につけられ、そして三日目にはきっと甦る』と言いなさった」（私訳）

「三日目に甦る！」この言葉はイエスがすでに三回語っておられたもので、今天使にこう言われて、ハッと気がついたのであった。

主が復活なさった！　驚天動地の出来ごと！　女たちは急ぎ帰って十一弟子と他の弟子たちに告げた。これを聞いて真っ先きに馳（は）せていったのは例の如くペテロであった。ペテロは墓場に布だけとりのこされてあるのを見て怪しんで帰って来た。弟子どもはみな女たちの言を妄語として受けとらなかった。共観福音書をみると、この女たちのなかで筆頭に記されてあるのは、七つの悪鬼を逐い出されて救われたマグダラのマリヤである。》

ここはさっき読んでいただいたところの記事なんですけれども、ここで重要なことは、

「なぜ、死んだ者の中に生きた人を尋ねるのです」

という言葉です。

●霊震

「なんで死んだ者の中に生きた者を尋ねるのですか。彼はもうここにいない。復活されたのです」

これは天使の言葉ですけれども、それを書いてくれたのが市川先生ですね。

「人の子は必ず罪ある人の手に渡され、十字架につけられ、そして三日目にはきっと甦える。」

と。「必ず」と「きっと」という言葉を、小池辰雄は訳しながら、「必ず」と「きっと」の両方を言っている。この聖書では「必ず」だけしか入っていない。「三日目に甦える」という所に「きっと甦える」といって、小池は二重に書いてくれている。神の約束されたことは必ず起こるんだということをここで天使が言った。それを小池が訳す時に、「きっと、必ず」というのが二重に訳の中に入れている。

「主が復活なさった！　驚天動地のできごと！」

ということが書いてあります。これは歴史の中でほんまにとんでもないことなんですよ。人が甦えるというのはとんでもないことです。だから、御霊によらなければ、普通はただオロオロするだけで、怪しんで帰ってくる弟子と一緒です。我々もそういうことをボーッと生きていたら――「ボーッと生きているんじゃねぇよ！」と言われそうですね――ボーッと生きてたら、結局は復活の事態を本当に心から受けとることができないというようなことです。だから、僕たちはこの弟子と一緒ですよ。もう復活ということをほんまに心底から受けとっているのかどうかというようなことを思いますね、もう弟子たちと全然変わらないと。

《墓穴の岩盤はどうして除けられたのだろう。「大いなる地震」とマタイ福音書は記している。地震は地震でも単なる地震とは思われない。復活のキリストが大喝、霊言を放ったので、霊震が起きて、ローマ兵も逃げ、岩盤も転落したにちがいない。十字架上のイエスが大喝なさったとき、聖所の幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起き、盤が裂けたのと同然である。》

ここで小池の解釈ですね。「大いなる地震」とマタイ伝にはちゃんと、地震が起こったということが書いてある。小池は「単なる地震ではないんだ」と。これは神さまによってキリストが復活されたでしょ。復活された時に

「キリストが大声を出して霊言を放った」

と書いてある。キリストが大きな声で、

「エリ、エリ、サバクタニ！」

とか言って、十字架上で叫んだ。そうすると、聖所の幕が上から下まで真っ二つに裂けた、それと同じなんですよと。キリストが復活されて大喝されたから、その霊震によって地震が起こったんですよと書いている。そういうことは福音書には書かれていない。これは小池が自分の体験から、こうであったに違いないということをここで書いている。

《永遠の生命を与えることがキリストの恵みである。そのキリスト自身が永遠の生命そのものであることを実証したのが、この復活の事実である。彼の永遠の生命は勿論おどろくべき次元の霊生であるから、我々の想像を絶する。人間の考え出すどんな深遠な思想も、どんな美しい芸術も、どんな進んだ医術・医薬も、人間に永遠の生命を与えることはできない。しかも人間の深層意識から欲求しているものは死んでも死なない生命である。これなくして救いということは不完全である、結局空しい。そのような人間の根源欲求をみたしてくれる唯一人の人、それはこの復活して不滅の霊生を自証したイエスのほかにあり得ない。

パウロもコリント前書第15章で、

「もしキリストの復活がなかったら、我らの信仰は空しい」

といっている。はじめは疑っていた使徒たちも復活のキリストの顕現に遭って、始め

て目がさめて、証者として立ちあがった。キリストが復活しなかったら、十字架もついに空しい。キリストのすべての言も行為も空手形になってしまう。

「甦った」「復活した」という表現は、在世中のイエスと同じ身体で生きかえった、ということではない。在世中のイエスより純化された霊体をとって、イエスが再現したことを意味する。肉体のイエスよりはるかに自由であり、力強い存在である。「甦った」は神がキリストを甦らせたのであり、彼自身がみたまの充溢（じゅういつ）で甦ったのでもある。ここでは本願と悲願がピタリ一つとなって天的生命に正に転身、変貌したのである。》

ここでは、とんでもない復活のことがあったんだけれども、

「永遠の生命を与えることがキリストの恵みである」

と書いてありますが、これはヨハネ伝6章にちゃんと書いてある。6章40節に、

「父の御意（みこころ）は御子（みこ）を信ずる者が永遠の生命を得ること、終わりの日にそれを復活させること、これが父の御意である」

とキリストが約束されている。だから、永遠の生命を与えることが神さまの願いなんです。誰一人例外なしに、「みな」と書いてありますよ。永遠の生命を与えることが父の御意であり、それを与えるのがイエスなんです。

「永遠の生命を与えることこそがキリストの恵みである。」

と。「永遠の生命」なんて僕らは分からないですよ。ここで生きていたら、どんなものが永遠の生命かさっぱり分からない。永遠というのは分からないけれども、

「聖書に書いてあるから、そういうふうに、死んでも死なない生命を与えるんだ」

というようなことを、小池は分かったわけですよ。だから、このヨハネ伝6章40節に書いてあるその通りのことをここで小池は書いている。

「永遠の生命を与えることがキリストの恵みである。そのキリスト自身が永遠の生命そのものであることを実証したのが、この復活の事実である。」

というようなことが書いてあります。

「彼の永遠の生命は勿論おどろくべき次元の霊生であるから、我々の想像を絶する。」

と。「我々の想像を絶する」ではなくて、全然分からないんですよ。永遠の復活なんて、全然、我々の頭の隅にも理解なんかとてもできるものではない。何かボーッと僕らは毎日生きてますよ。永遠の生命なんて全然分からない存在として生きているけれども、

「神さまが約束されているから、永遠の生命は必ずある」

ということを――

「見ぬものを信ずるというのが信仰だ」

と言いますよね――だから、我々は理解できなくても、

「キリストが復活された」

というその事実は御霊によって知ることができるから、そこに我々は生きていくわけです。

我々の想像を絶していても、復活されたことは事実ですから、まざまざとそれが示されたわけですから、その中に我々は生きていけばいい。人間の考え出すどんな深遠な思想、技術も、それは「永遠の生命」を与えることはとてもできないということ、それは当然です。神さまのなさっているようなことは、人間のやっていることとは全然違うから、どんなに技術が進歩しても、永遠の生命なんてものはとても与えることができない。それは当然のことです。ここで、

「しかも人間の深層意識から欲求しているものは死んでも死なない生命である。」

と。人間はもうあきらめているんですよ。死んだら、もう死ぬのは当たり前だとか、あきらめて生きているけれども、人間の本当の欲望というのは、

「死んでも死なない生命がほしい」

というのが人間の本当の気持ですよ。それを小池は「悲願」と言っています。仏教用語で人間の思いを「悲願」と言っている。

「人間の根源欲求をみたしてくれる唯一人の人、それはこの復活して不滅の霊生を自証したイエスのほかにあり得ない。」

ということをここで書いてます。イエス以外の者にはこの復活の生命は有り得ないんだと。そして最後の行に、

「ここでは本願と悲願がピタリ一つとなって天的生命に正に転身、変貌したのである。」

と。我々は復活という体に必ず変貌させられていく存在なんです。人間の悲願、永遠の生命を持ちたいという深層の意識をかなえてくれたのが神さま、キリストですよということを言っている。

「ここでは本願と悲願がピタリ一つとなって天的生命に正に転身、変貌していく」

これが我々の存在なんですよという。

「在世中のイエスより純化された霊体をとって、イエスが再現したことを意味する。肉体のイエスよりはるかに自由であり、力強い存在である。」

イエスという方は復活されたらもの凄く、地上におられる時よりも純化された霊体となって、はるかに自由であって、はるかに力強い存在として復活されたんだということをここに書いてくれている。

あとでも出て来ますけれども、復活されたイエスを、最初はイエスだということが分からない。あとで出てくる「エマオ途上」の時もそうです。始めイエスが来られたけれども、イエスだとは分からなかった。マグダラのマリヤもそうですよ。墓に行って、墓守（はかもり）だと思った。イエスというが分からなかった。ガリラヤ湖で弟子たちが漁をしていた時も、始めイエスだということが分からなかった。

「より自由で、よりはるかに力強い存在である」

というようなことですね。それがあとから出てきます。

●エマオ途上

《エマオ途上

その日のひるさがり、エルサレムの西北方エマオに向って路を急ぐ二人の旅人があった。彼らは道すがら、キリストの磔刑（はりつけ）のことについて、あまりにも不合理な、非道な出来ごとであるので、悲しみやる瀬なく語ったり論じたりしていた。

すると見知らぬ第三の旅人が近づいてきた。二人は、はじめ変な男が来たなあと思った。果然この男は二人に

「あなた方が歩きながら、お互に語り合っていることがらは一体何ですか」

と設問した。二人はこの問いを意外に想った。というのも彼らはイエスの無惨な死を痛み悲しんでいたからであった。その一人であるクレオパという名の男がこれに答えて言った。

「あんたはエルサレムに宿っていて、この頃あそこに起こった事件を知らないんかね」

するとこの第三の男は、

「どんなことですかね」

と、とぼけたように問い反（かえ）した。そこでクレオパは更に言をつづけた。

「ナザレ人、イエスのことですよ。あの人は神とすべての人の前で、わざにも、言葉にも、霊能ある預言者でしたが、祭司長たちや役人たちが、死罪に定めようとしてあの人をローマの官憲にわたし、とうとう十字架につけてしまったんですよ。私たちはイスラエルをローマの権勢から贖い出してくれる者は、あの人だと望んでいたんです。そればかりか、磔刑があってから今日はもう三日目なのに、私たちのなかのある女たちが私たちを驚かせたのです。というのは、女たちが早朝に墓に行ってみたら、屍が見えないので帰り、しかも天使たちが現われて、『イエスは活きておられる』と告げたと言うのです。私たちの仲間も数人同じく墓に往ってみたところ、まさしく女たちの言った通り、イエスが見えなかったのでした」》

ここは記事をそのまま書いているけれども、「クレオパ」という人が、

「私たちはイスラエルをローマの権勢から贖い出してくれる者は、あの人だと望んでいた」

とあるように、弟子たちは、キリストというのは現世のローマからの解放を望んでいる単なる地上の英雄のように見ているということがこれで分かります。弟子たちは最後の最後まで、ペンテコステまではやっぱり地上の贖いだけを考えていたということが言えます。

《旅人のこの陳述を聞いていた第三の男は、急に調子を変え力をこめて言った。

「ああ、愚かで預言者たちが語った凡てのことを信ずるに鈍感な人たちよ！　キリストは必ずこれらの苦難を受け、十字架につけられ、必ず復活して栄光の天界に

入ることになっているのではないですか」

二人の旅人は、こんどは別な意外の感に打たれ、急にその男の言に耳を傾けたくなった。これを直覚した第三の男は直ちに言を継いで、エマオへの路を辿りながら、イスラエル民族の出エジプトを敢行したモーセを始め、エリヤ、アモス、ホセア、エレミヤ、イザヤ等々多くの預言者のメシヤ預言に関わることを中心に霊的な情熱をこめて説き示すのであった。この人の言のひびきは完全に二人の旅人の心をとらえてしまった。第三の男の旧約聖書の語らいは尽くるところを知らないありさまである。とうとうエマオ村に近づいたのに、彼はなお語ってやまず村をも通り越して進みゆく気配であったので、強いてひきとめて言った。》

ここで第三の男の旅人が、

「ああ、愚かで預言者たちが語った凡てのことを信ずるに鈍感な人たちよ！　キリストは必ずこれらの苦難を受け、十字架につけられ、必ず復活して栄光の天界に入ることになっているのではないですか」

と二人の旅人に言うわけです。この「愚かで、鈍感な人たち」とは我々ですよ。ほんまに愚かで――この「愚か」というのはＩＱが低いとかいうのとは違います――要するに神さまに対して鈍感なんです。我々はいつも神さまに対して鈍感です。本当に愚かで預言者たちが語ったことも何も頭に、全然入っていない。だから、鈍感です。「鈍感」というのは「スロー」（slow）という英語が書かれています。「愚か」というのは「フーリッシュ」（foolish）と書かれてますけれども、「バカ者」という意味です。それは神さまに対してバカ者、神さまに対して鈍感なのが、我々存在そのものなんです。ところが、

「キリストは必ずこれらの苦難を受け、十字架につけられ、必ず復活して栄光の天界に入ることになっているのではないですか」

と説明する。ここでも「必ず、必ず」と、必然性であるという。

「神さまがなさることは必ず成るんだ」

ということを重複して小池はこの二つの「必ず」と――さっきも見ましたね、「必ず、きっと」が入っていると――「必ず復活する」というところに小池はこの副詞を「必ず、必ず」と付けている。そのあとで、

「多くの預言者のメシヤ預言に関わることを中心に霊的な情熱をこめて説き示すのであった。この人の言のひびきは完全に二人の旅人の心をとらえてしまった。」

と。小池はよく、

「響きを受けとれ」

と言いました、「響き」ということを。理屈で受けとるのではない。これは理屈で、理性で受けとったらダメなんです。こういうものは御霊の響きですよと。

「言葉の響きというものは、御霊で教えてもらわなかったら分からない」

ということが言葉の響きです。そういうことを小池は「響き」という言葉にこめている。

「響きで聞く、御霊で聞くんですよ。御霊によらなければ何も分からない」

ということがここで言われている。小池がよく言う「言葉の響き」というのはそういうことです。頭で受けとったらこれは何も分からない。頭で受けとったら、「復活」なんていうことは絶対ありえないことなんです。

≪「私たちと一緒に留ってください。もう夕方になって、日も暮れかかっています」

そこで第三の男は宿舎に入って、夕食の席についた。そこで彼はパンを取って祝し、感謝の祈りをもってパンを裂いて二人に与えた。この動作と祈りの声で、目が覚め、この第三の男こそは、問題の人イエスであることを直覚した。と次の瞬間にイエスは姿を消してしまった。どこへ行ってしまったのか。目が覚めた瞬間に実は彼らの心の中にイエスの姿が焼印の如く跳びこんだ。と同時に霊体のイエスは電光石火の勢で、またほかの弟子どもの心によみがえりを与えんとひきかえした。

食卓に居残った二人の旅人は異口同音に、

「途上で私たちと語り、私たちに旧約聖書を説き明かしておられるとき、私たちの心がうちで燃えたではないか」

と感慨深く語り合った。然り、二人の旅人の胸に霊燈が点ぜられた。彼らの心こそ死にかかっていたのを、復活せしめられた。≫

わたしたちの生まれながらの心は本当ににぶいんですよ、生まれながらの我々は本当に神に対して鈍感でにぶくてフーリッシュ、バカなんですね。だから、

旧約聖書の預言も理解できず、新約聖書の証言も信じられない」

ということなんです。

「「目が遮られていた」とき見えていたのは、復活者としてのイエスの本質ではなく、地上のイエスの姿だけだったのです。」

地上のイエスの姿だけが見えていた。だから、これはイエスだとは気がつかなかった。霊の目が開かれた途端に、イエスの復活者としての永遠の生命であるキリストの本質を見たということなんです。

それで、小池辰雄は、

「目が覚めた瞬間に実は彼らの心の中にイエスの姿が焼印の如く跳びこんだ。」

と書いてあります。イエスの姿が、イエスの本質が見えた時に、それが我々の心の中に飛び込んだんですよと。これが小池がいつも言っていることです。

「あれはどこに行ったのか、見えなくなったのはどこへ行ったのか」

ということを小池は言います。

「それはイエスの本質である永遠の生命が我々の中にとびこんだんですよ」

ということを小池は言うんです。だから、

「二人の旅人の胸に霊燈が点ぜられた。彼らの心こそ死にかかっていたのを、復活せしめられた。」

と、小池は書いてます

●復活のキリストの霊体

《二人は夕食もそこそこ、直ちにエルサレムへ逆行した。十一弟子らが心さわがせてキリストの復活を語りあっているところへもどり、ありしことを語った。するとそこにイエスは再び現われて

「平安汝らに在れ」（シャローム・ラーケム）

といった。単なる挨拶ではない。幽霊かとおそれまどう彼らに、自分は幽霊ではない、自分には手も脚もちゃんとある、肉も骨もある、

「撫でて見よ」

とまで言うではないか。彼らはあまりのことに歓喜したもののまだ信じかねていたら、イエスは

「此処に何か食物があるか」

とたずねた。炙（あぶ）った魚一片を供じたら、イエスはみんなのあやしむ前で食べた。

キリストの霊体は驚くべき次元のものだ。おそらく大方の神学者、牧師がこの記事を宗教物語として、まともにはうけとらない。ある聖書学者のグループがこの個所を笑って、真剣に受けとめようとしなかったので、この馬鹿正直の私はその後そのグループからサヨナラをしたことがある。なぜ私はこう馬鹿なんだろう。私は復活のキリストの霊体が実に想像を絶するおどろくべき次元のものであることを寸分疑わない。もしそうでないなら、死んでも死なないいのち、霊生はいつわりとなる。復活のキリストの霊体の骨と肉こそ、わが骨の骨、わが肉の肉と私は告白する。これが私の本当のいのちだ！》

エマオの途上から消えて、そして弟子たちが集まっていた所にまた復活されたキリストが現れる。復活のキリストというのは、僕らの想像を絶します。幽霊かと思うんですけれども、実際は炙った魚でも食べることができる。手に釘の痕があるとか。ところが、弟子たちが戸を閉じている所にキリストが現れる。それは何か幽霊みたいなんですけれども、実際に来られると食物まで食べることができるという、驚くべき次元の霊体ということなんです。

聖書を信じているような人たちでさえ、これは聖書物語として実際には信じていない、ということをここで小池は言う。実際、私たちが復活の生命にあずかるということは、何べんも言いますように、とんでもないことなんです。もう想像することさえできない。ところが、ここに聖書を書いた人が自分が体験したことを縷々（るる）と書いている。これを信ずるかどうかは我々にかかっている。けれども、その「信ずる」というのはただ理屈で信ずるのではない。

何回も言いますように、理屈で信ずるのではない。これは御霊によって、十字架と御霊によってしか、我々はこれを理解することはできない。小池辰雄はそれを体験しているから、

「これは単なる聖書物語ではない。死んでも死なない生命を与えないではいられないような復活の記事として、私はそれをそのまま受けとる」

ということを言っている。

「想像を絶するおどろくべき次元のものであることを寸分疑わない。」

もう絶対に疑いませんよと。

「もしそうでないなら、死んでも死なないいのち、霊生はいつわりとなる。」

と。本当に我々は復活して、こう聖書に書いてある通り、

「我々は本当に霊体を与えられる時が来るんですよ」

ということです。もしもこれが聖書物語だったら、復活が単なる宗教物語だったら、これは我々に永遠の生命なんかを与えることは不可能です。小池は、

「復活のキリストの霊体の骨と肉こそ、わが骨の骨、わが肉の肉と私は告白する。これが私の本当のいのちだ！」

と。これは小池にとっては譲れないんです。誰が何と言っても、この復活の体に自分も永遠の生命にあずかるということを、もう言わざるを得ない。

「これは私の骨の骨、肉の肉だ！」

というふうに小池は告白している。

我々は、そういう復活されたキリストに出会うことはないですよ。なくていいんです。もう聖書に書いてあることで充分なんです、それを信ずるか信じないかは。

「見ずして信じる者は幸いである」

と書いてありますように、我々はここで

「もう一度、復活者キリストに会いたい」

とか、そんなことを思う必要は全然ない。聖書に書いてあることを全部、「イエス（Yes はい）」と受けとることが「信ずる」ということです。それ以外のことはありえないんです。だから、よく

「今でもキリストが生きておられるから、復活して会えますよ。死んだ者が生き返りますよ」

とか、そういうことを声高（こわだか）に言う人がおられるそうですけれども、それはちょっと邪道ですよ。聖書に書いてあることで十二分なんです。

「それを受けとるかどうか」

ということが、我々に試されているというようなことなんでしょうかね。そういうふうなことを、これを読んでいて感じます。

《そして復活のキリストは弟子たちに最後にこう確言した。

「**視よ、私は父が約束なさったもの（聖霊）をおまえたちに贈る。おまえたちは上から霊能を著せられるまで都に留って（祈って）居れよ**」（ルカ24・49）

ヨハネ福音書にも書かれてあるように、イエスはいよいよ弟子たちと訣別のときが近づいたとき、

「**私は父にお願いをする。他に助主を与えて、永遠におまえたちと偕に居てくださるようにする。それは真理の御霊である**」

と言った。

聖霊が降臨しなかったら、キリスト教会の歴史は始まらなかった。聖霊が降臨しなかったならば、ペテロもヨハネもパウロもヤコブも使徒にはなれなかった。新約聖書の文字も埋もれてしまったであろう。》

これは、

「**私は父にお願いをする。他に助主を与えて、永遠におまえたちと偕に居てくださるようにする。それは真理の御霊である**」

これはヨハネ伝14章に書いてある。15節から「聖霊を与える約束」という所ですよ、

「**父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。17この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。**」

キリスト教会でも、

「御霊というのは何か変なものだ」

というような意識があって、それを知ろうともしないから、観念的になっていく。観念になっていくと、復活なんてとても信じられなくなります。そういうことが書いてある。

「**この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。18わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。**」

こういう約束がある。

「あなたがたの内に宿る、あなたがたの内の中で生きるんです、あなたの中で生きますよ」

ということが、この聖霊を与える約束の「弁護者」という御霊なんです。そのあとにずっと書いてます。

「**わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる。**

私が天界で生きているから、あなた方も生きるんだと。

20かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内にいることが、あなたがたは分かる。」

と。ここに「内に、内に」と訳している。キリストが神の内に、神さまに抱かれて存在した存在と同じように、十字架で復活されたキリストは我々を抱いて、我々のうちに住んで

くださるという約束がここにちゃんと書いてある。

「視よ、私は父が約束なさったもの（聖霊）をおまえたちに贈る。おまえたちは上から霊能を著せられるまで都に留って（祈って）居れよ」（ルカ24・49）

ヨハネ福音書にも書かれてあるように、イエスはいよいよ弟子たちと訣別のときが近づいたとき、

「私は父にお願いをする。他に助主を与えて、永遠におまえたちと偕に居てくださるようにする。それは真理の御霊である」

と言った。これが

「弁護者を遣わす」

というふうに新共同訳聖書には訳されている。そしてペンテコステからキリスト教会の歴史が始まったということです。「聖霊を与える約束」というヨハネ伝14章15節から最後まで、聖霊を与える約束をきちっと言っておられます。それがここの所に二、三行で書かれてあるところがそれです。必ず私たちのうちにおるという。

「キリストが私たちの内で働かれる、それが聖霊です、聖霊として同伴者としてあなた方の内にいつもいるんですよ」

ということをここで約束されている。

●「十字架・御霊・復活」の三点セット

《世の中には贈物は数かぎりなくある。この世のいかなる高価な贈物も、無代価の、ただの――実は私たちが罪びとでどうにもならぬので、キリストが十字架という代償を自ら支払って、ただで賜る――贈物、聖霊に比べ得るものはひとつもない。私は二〇歳の青年期に、ともかくも信仰の世界に踏み込んだ。それから約三〇年、内村鑑三先生の流れ、無教会に棹さしていた。ところがどうも信仰にどこかものたりなさを感じていた。信仰のすじは確かに良いと思っていた。内村、藤井、塚本と無教会の三先生に相前後して師事して来た。どの一回といえども今日はつまらなかったなどと思う集会はなかった。優れた聖書講義であった。祈りも決して単なるあたまの祈りではなかった。心の祈りが充分あった。しかし霊の祈りというものを知らなかった。そこに問題性があった。パウロがコリント前書第14章第15節で

「我は霊をもて祈り、また心をもて祈らん。我は霊をもて謳い、また心をもて謳わん」

といっている事態は、聖霊を受けなければわからない。聖霊のバプテスマにあずかって以来、俄然、聖書の味がちがって来た。新約聖書は聖霊のはたらきのもとに書かれている文字であることが瞭然として来た。キリストの十字架のあがないを通って与えられるみ霊である。旧約聖書の現実には神霊がはたらいているのではあるが、受ける人間の側の態勢がキリスト以前であるから、次元的動揺や層の相異が感ぜられる。

イエスの如き霊生の実存あざやかなる完璧の人が、十字架の贖罪の大業を果したあとで、顕然たる霊性の復活体、霊体を具（そな）えた存在によみがえらないとしたら、これこそ不合理である。キリストの復活は当然至極な事態なのである。四福音書の復活の記事の比較研究から、果してキリストは復活したのだろうかとか、それはどういう現象であるかなどと詮索したい人にはさせておけばいい。聖書はまだ伝えそこねている、伝え足りないでいると申したい。旺んなるかなキリストの霊生！　聖書の記事は伝えがたくて呻いている。》

最後に、

「聖書の記事は伝えがたくて呻いている。」

と言っている。小池辰雄は十字架を受けとって御霊に満たされた以後、凄いところに入って行かれたから、そのことを語らないではおられないということで、

「聖書はほんのひとかけらなんです。聖書に書かれていることは、神さまの事態の本当にひとかけらです。まだまだ呻いているから、それをあなた方はよく知ってください」

という意味でここに書いている。ここで、

「キリストの十字架のあがないを通って与えられるみ霊である。」

と書いてある。十字架がなかったら、この

「十字架と御霊と復活」

のこの三点セットがなかったら、これは本当に全然、聖書というものは理解することができない。そういうことをここでちょっと小池は書いてくれてます。それから、

「我は霊をもて祈り、また心をもて祈らん。我は霊をもて謳（うた）い、また心をもて謳わん」（コリント前14・15）

と。これは

「霊で祈り、理性でも祈ることにしましょう」（新共同訳）

というような訳にもなっている。どうしても、

「御霊というのはちょっと変だな」

と思ったりしたら、これはダメなんです。

変な霊というのがあるんですよ。だから、十字架をぬいた御霊ということになると、霊的傲慢になって、狐憑（つ）きとか、そういうふうになる。どこまでも十字架に平伏（ひれふ）した御霊でないと、これは出て行くんです。

「健全な福音というものをどうしても伝えたい」

というのが小池の思いですよ。奥田昌道先生も、健全な福音を伝えたいという一心です。健全な福音というのは、「十字架と御霊と復活」というこの三点セットが我々の中にきちっと確信をもって得ていないと、変な方向へ行ってしまうということになる。

御霊ほど素晴らしい贈物はないんだというようなことを言ってますね。

「この世のいかなる高価な贈物も、無代価の、ただの――実は私たちが罪びとでどうにもならぬので、キリストが十字架という代償を自ら支払って、ただで賜る――贈物、聖霊に比べ得るものはひとつもない。」

ということを小池は言ってます。これは

「御霊で祈る」

とか、「御霊」ということを何べんも言いますよ。十字架というものをぬきにして、御霊ということを言うと、変な霊に取りつかれていく。だから、

「十字架を通った御霊だったら、これは健全なキリスト教になるからこの三つは必ず受けとってほしい」

ということを小池は言う。

「キリストが十字架という代償を自ら支払って、ただで賜る聖霊に比べ得るものはひとつもない。」

と言ってくれてます。

「キリストが復活されなかったら、これこそ不合理である。キリストの復活は当然至極な事態なのである。」

ということを小池は言う。

そういうことで、この「復活」のところを終わりたいと思います。